

# 中世ケルトの至宝『ケルズの書』\*

高 田 恵利子

## Abstract

The most famous manuscript in the Library of Trinity College Dublin, Ireland, is the *Book of Kells* which has survived miraculously since Europe's early Middle Ages, despite the social, political and religious upheavals of the times. It contains 680 pages (340 folios). We are here concerned mainly with the three pages of this magnificent manuscript, namely, the folios 7V, 8R and 34R.

All the illuminated three text pages are equally centered on the theme of the birth of Jesus Christ extracted from the first two chapters of the *Gospel According to St. Matthew*. The folio 7V reveals an exquisitely illuminated picture with a touch of Byzantine school, in which Mother Mary holds Infant Jesus tenderly in her arms. They are surrounded by the four angels with their colourful wings. The divine child who sits on his mother's lap has his right hand hold his mother's right hand, whereas his left hand is lifted upward as if he were adoring the Father in Heaven.

The folio 8R reveals the narrative of "Christ's birth in Bethlehem of Judea, the wise men offered gifts and the children were killed. Their Return from Egypt". These words are written in both Latin and Greek, by means of Celtic graphic symbols, which are beautifully emblematic. They are placed within the highly decorated framework which is artistically embellished with interwoven patterns of laces, plants and animals.

The folio 34R dispaly the most intricate of the decorated text pages, where the ornate pattern is built around the Greek letters XP, Chi-Rho to represent the first word *Christ*. We can also find two moths and three angels around the letter "X" as well as mice eating the showbread, while being watched by two cats with a mouse on each of their backs side by side with a black animal, "presumably, an otter", holding a fish in its mouth.

These three text pages abound in symbols of Christological and Eucharistic significance, where at the same time specific descriptions of bestial and marine creatures are interlaced harmoniously with Irish patterns of verdurous plants and mysterious figures. The Library of Seisen University has the privilege of owning one of the limited facsimile versions of this Medieval masterpiece of the world-famous treasure.

---

西欧最高の写本『ケルズの書』は、アイルランドの国宝であるばかりか、さらに、世

\* *The Book of Kells: The Sumptuous Celtic Manuscript*

界が生んだ最も優れた文化と芸術の傑作である。現存する数少ない彩色本のなかでも、この写本は絵巻物のような美しさがあり、また、あざやかな色彩による絵模様や図案、とくに、アイランド風イニシャルの華麗な字体が顕著な特徴である。これはラテン語で書かれた福音書であり、フォリオ刷 340 葉 (24×33 cm) の写本である。そこには、4 人の福音史家、すなわち、聖マタイ、聖マルコ、聖ルカ、聖ヨハネによる福音書のかずかずの箇所が抜粋され、とくに、神の子イエス・キリストの生涯が中軸となって、その教えや不思議な出来事の数々が生き生きと表現される。終りの部分では、キリストの受難とその栄光に満ちた勝利が輝かしく称えられ、真理の霊である聖霊の到来が喜ばしい約束となって表わされる。

## (1)

この書が最初に制作されたのは、スコットランド西部に当たるアイオナ島であるとの説が最も有力である。<sup>1)</sup> それ以前に、アイルランドの修道会制度を設立したと考えられる聖コロンバ(521?~597)によって、アイオナ島の修道院が 565 年頃に設立された。<sup>2)</sup> アイルランドの国という、現代においては西欧の果てと考えられるが、聖パトリック(389?-?461)によって、キリスト教が 432 年に伝えられて以来、その輪が全国に大きく広がって、とくに 6 世紀から 12 世紀にかけては、文化の上では黄金時代を迎え、「聖人の島」、「学者の島」<sup>3)</sup> とか、また、「聖人と学者の島」<sup>4)</sup> と呼ばれるほどであった。それは、西ローマ帝国が 476 年に滅び去って以来のことで、ヨーロッパは暗黒時代を迎えていた時期に当たる。当時、アイルランドから見れば、フランスやドイツでさえ、文化的な面では遙かに立ち遅れ、ましてやイギリスは異教の地と呼ばれるに値した。

この小さな島アイオナには、聖コロンバによって修道院が築かれて以来、学問の泉となって、多くの学者たちがヨーロッパ大陸から集まって来た。聖コロンバが亡くなった時には、この創立者への敬慕の印として、修道士たちが新約聖書を筆写し始めたのである。そこで、『ケルズの書』の誕生を見ることになる。それは、大体、紀元 700 年後半頃のことである。しかし、当時、ヴァイキング(8 世紀から 10 世紀にヨーロッパ北部、西部海岸を略奪したスカンジナビア人)による激しい襲来が伝えられ、恐怖を感じた司祭や修道士たちはこの島からアイルランド本国へと難を逃れて急ぎ、首都ダブリン北西 40 マイルほどにあるミーズ州の寒村ケルズにある修道院(807 年建設)へと移って行く。修道士たちが運んで来た荷のなかには、この『ケルズの書』の未完成の写本が大事に保存されていた。そこで、その修道院のなかで、その写本の制作が修道士たちによって続行されることになる。このようにして、『ケルズの書』の名称の由来は、名も知れぬ小さな町ケルズに負う結果となる。<sup>5)</sup> おそらく、8 世紀の後半または 9 世紀の前半には、その写本の完成(おそらく 370 葉のフォリオ刷)を見るに至ったに違いない。<sup>6)</sup>

そのうち僅か2頁を除くすべての頁に彩色が施されている。鉛丹や貝殻色の赤、<sup>ケルメス</sup>白鉛の白、石黄の黄、緑青の緑、ラピスラズリの群青、薄<sup>ソリウム</sup>層の薄紫、インディゴや大青の藍が、良くなめされた厚い子牛皮紙を彩っている。<sup>7)</sup>

このように、西ヨーロッパに伝えられる初期キリスト教時代の装飾本のなかでも、もっとも色鮮やかな宝石のような輝きと美しさが横溢した作品である。その色彩感覚に秀でた絵模様、ダイナミックな渦巻と組紐文様、輝く動物・葉状形象などによって、ケルト芸術の粋が表現された写本である。

しかし、この素晴らしい宝が描く運命は決して容易なものではなく、とくに数々の変転を経た後に、現在あるように、全世界における希な貴重本として遂に認められ、保存されるに至ったのである。P. ブラウンによると、『アルスター年代記』に述べられるように、“the great Gospel of Colmcille”と名付けられ、聖コルンバンに捧げられた偉大な福音書（『ケルズの書』の意）が1007年に修道会から盗まれている。しかし、この写本の外側にある黄金の飾りがすべて剥奪されてから、2箇月と20日の後に戻されている。1539年には、ヘンリー8世による「修道院解消令」によって、この修道会は解散された。この『ケルズの書』（当時344葉のフォリオ刷）は教会の責任者の手を何回か経た後に、1681年前後には、有名な古書収集家であるミーズの司教ヘンリー・ジョーンズ(1661-82)の手に移って、ダブリンにあるトリニティー大学の図書館に寄贈された。しかし、同図書館にある貴重本のリストにはこの写本が当時含まれていなかったため、18世紀の時代には、その真価がまだ見出されていなかった事実が明らかである。この書の製本は1895年に行われているが、それは非常に粗雑なものであったため、すぐに解体の憂き目に遭遇している。しかし、1953年になってやっと、現在の4冊に分けた分冊本として、最終的な製本が施行された。<sup>8)</sup>

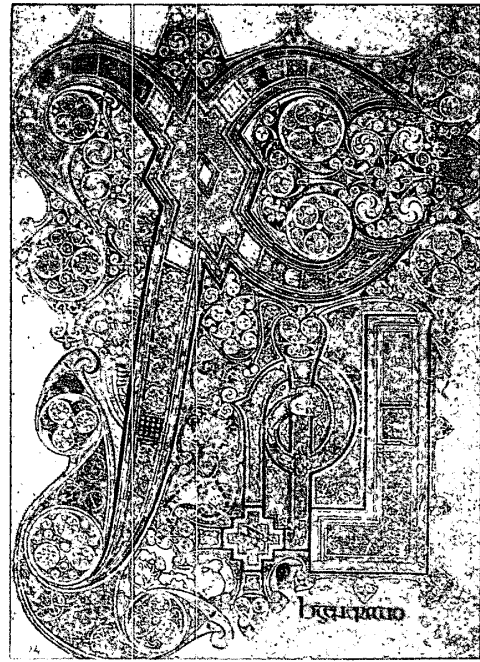
## (2)

この書の初めには、他の写本にあるように、4福音書の並列箇所が記されている。次いで、聖マタイによる福音書の第1章が記され、イエス・キリストの降誕の次第が述べられる（7葉裏）。（p.64参照）そこには、聖母マリアと神の子イエスの姿が生彩を帯びた絵画となって、ひとときわ輝きを放っている。聖母マリアが幼いキリストを膝に優しく抱いて、高い背のついた王座のような椅子に腰掛けている。また、幼児はその右の手を母の右の手にしっかりと置いて、その左手を上を上げ、あたかも天の父に目を向けて、礼拝しているかのような様子である。

この場面の中心はキリストであり、その緑色の衣服が浮き彫りにされる。そこには、キリストの言葉である「わたしは道であり、真理であり、命である」（『ヨハネによる福



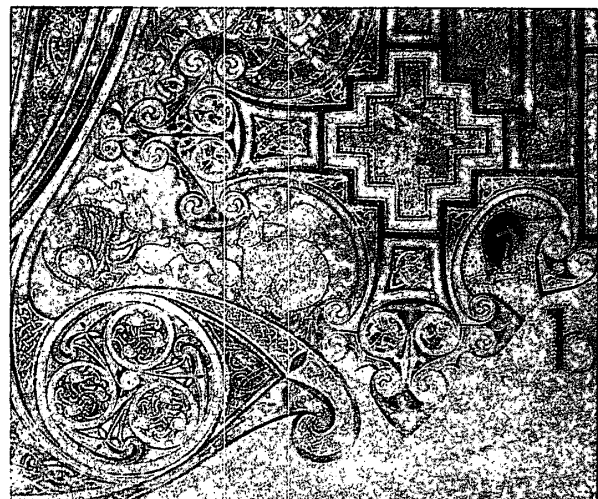
7 葉裏



34 葉表



8 葉表



34 葉表の下部

音書』14章6節)が生き生きと想起され、とくに、生命の象徴である明るい緑色によって、キリストが生命の源であることが表現される。同じ緑色が天使たちの衣と羽の部分と周りの枠などに散りばめられ、統一したイメージが与えられて、画面一杯に広がる希望に溢れた明快な雰囲気非常に印象的に写し出される。

ビザンチン芸術のケルト文化への大きな影響がすでにうかがわれる。とくに、ビザンチンのイコンの様式に則っているかのように、聖母マリアの頭の回りには透かし模様の輪光が描かれる。また、それは神の母であることを示す記しでもある。<sup>9)</sup> この聖母の真上と両方の側には、3つの半円が描かれて、十字形を刻んでいる。また、聖母の輪光にも、3つの小さい十字架がくっきりと記される。このような象徴的図形が刻まれることによって、キリストの十字架上での苦難と死が予告される。また、この同じ頁の右側に、半円形が記されているが、そこには人の姿が描かれ、その両足には赤い色の点の一つずつ刻まれて見える。これは、キリストが復活した後に、聖トマの求めに応じて、手足の釘跡を見せる場面を彷彿とさせる。(『ヨハネによる福音書』20節24～29節)このように、この降誕による救いの業は、キリストの十字架上の犠牲を通じて、最終的な復活と勝利の出来事によって完成されることが示される。キリストの誕生とその十字架上の苦しみは、その救い主の業にとっては、表裏の出来事であることがここに明らかにされる。

この写本には、キリスト教の教義が多く包含されている。たとえば、聖母マリアを覆う衣が紫がかった茶色のマントであり、また、幼児イエスの緑色の衣には黄色の裾が大きく広がりを見せる。そこに共通する事柄は、3つ揃いの斑点が描かれていることである。その斑点模様がそれぞれ白色、または、茶色によって表現される。これは、一見、単なる模様として印象付けられるが、仏教における地、水、火、風、空による「5」の数字の重要性と同様に、この3つの斑点の模様は「3」という数字を含んでおり、とくに、神である父と子と聖霊のペルソナ的存在が暗示される。3つの斑点をあしらった図案は、他の多くの頁にも観察される。たとえば、27葉表と32葉裏の頁には、聖徒たちの衣が同じ3つの斑点模様で彩られる。このように、キリスト教の神髄である三位一体の秘義が暗示的に描かれる。

このキリスト降誕の場面には、旧約聖書の数々の箇所との共通点が見出される。聖母マリアと幼いイエスが位する上の部分と下の部分には、2人ずつの天使がそれぞれ見守っている。そのなかの3人の天使は、片方の手に、扇形の頭をした杖を握っている。その杖は、旧約聖書のなかで、ダビド王による『詩編』23番にあるイメージと共通する。

<sup>し。</sup>主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴ひ

魂を生き返らせてくださる。

主は<sup>み</sup>御名にふさわしく

わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも

わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける。

『詩編』23章1～4節

上記のように、神は私たち一人ひとりを養い、導いてくださる方である。この良き牧者は、時には、「鞭」や「杖」を使って、人びとを敵から保護される。新約聖書によると、良い羊飼いであるイエス・キリストは、他の99匹を置いてまでも、迷っている1匹の羊を探し求める(マタイの福音書18章10～14)。聖ペトロの後継者として、また、カトリック教会の責任者、指導者であるローマ教皇は、公式の場において、この同じ「杖」(または「しゃく」)を牧者の象徴として携えるのが伝統的な習慣である。たとえば、第二バチカン公会議を召集した偉大な教皇と呼ばれるヨハネ23世(1958～63)、および、次の教皇パウロ2世(1963～78)が携えていた聖杖は横の線が3本刻まれたものである。この聖杖は、「ローマ教皇の十字架」と通常呼ばれる。また、現在の教皇、ヨハネ・パウロ2世(1978～)は苦悩するイエスの十字架像を頭に抱く聖杖を用いる。これは、よき牧者キリストの代理者である教皇が救いの業に深く参与し、世界中の苦しむ人びとと連帯することを象徴する。<sup>10)</sup>

この写本には、聖母子像の右下にいる天使の姿のなかに、三つ葉を二枚片手に携えて描かれる。この絵図の部分は、旧約聖書のイザヤ書からの引用である「エッサイの株」を象徴する。<sup>11)</sup>

エッサイの株から ひとつの芽が萌えいで

その根から ひとつの若枝が育ち

その上に 主の霊がとどまる。

知恵と識別の霊

思慮と勇気の霊

主を知り、畏れ敬う霊。・・・

弱い人のために正当な裁きを行い

この地の貧しい人を公平に弁護する。・・・

エッサイの根は

すべての民の旗印として立てられ

国々はそれを求めて集う。

『イザヤ書』11:1～4, 10

この「エッセイの株」によって、「若枝」である救い主イエス・キリストが美しい開化をもたらすことが予言される。イエスはダビデ王の株から生えた新芽を通して誕生している。ドン・ボスコ社出版の『新約聖書』によると、イエスが育ったナザレは「芽の町」の意とされる。<sup>12)</sup> このように、キリストはダビデ王の父であるエッセイを先祖とする末裔であることが予告され、とくに、彼が平和をもたらす王であることが伝えられる。

この同じ『イザヤ書』には、予言の言葉が多く告げられる。『マタイによる福音書』では、救い主に関する予言が引用され、イザヤの言葉が多く記される。

身よ、おとめが身ごもって、男の子を産み  
その名をインマヌエルと呼ぶ。

『イザヤ書』 7章 14 節、

『マタイによる福音書』 1章 23 節

上記のように、イエス・キリストが「インマヌエル」すなわち「神は我々と共におられる」ことを証しするために、聖母マリアの子となって、この世界に誕生された。この新約聖書の箇所はイザヤ書の予言の成就を意味する。興味深いことには、この写本にある「エッセイの株」は、とくに、ケルト文化に根付いたイメージであるシャムロックに似て描かれている。このシャムロックの葉はアイルランド国を象徴するシンボルである。しかし、それは一見シャムロックに見えるが、その色は、実際には、明るい黄色で塗られていて、常に見られる緑色を呈していない。このような事実によって、旧約聖書の「エッセイの株」、すなわち、救い主イエス・キリストのイメージが強調されていることが容易に理解される。

右側の縁飾りの絵には、6人の修道士が右側の方向を向いている。このイメージに関しては、J.アレキサンダーの解説によると、イエス・キリストがエッセの末裔であることが主張されて、キリストの先祖たちが描かれていると解釈される。<sup>13)</sup> または、その絵を画いた修道士が、自分の属する修道会の同じ仲間の人びとを肖像画に表わし、その絵のなかに加えていると理解できる。また、その人びとが右の方向をとくに向いている事柄は、読者の関心を次ぎの頁に傾けたいという意向があったからとも判断できる。このように、この絵を画いた修道士たちの個人的な思惑などが生き生きと表現されて、また一層興味をそそる要素が多く見出される。

### (3)

この写本には、既に述べたように、アイルランド独特のあでやかな飾り文字でいろどられた頁が数多く見出される。とくに、キリストの誕生を語る8葉表の記事には、写本

に携わった修道士の信仰心が反映され、興味深い要素が見受けられる。(p. 64 参照) 『マタイによる福音書』の第1章と2章が簡潔に概要された記事が紙面いっぱいに書かれている。当時のカトリック教会の通用語ラテン語で語られる叙述のなかに、ギリシャ語で書かれたキリストの名が目立って見られる。“Natiuitas *χρ*i in Bethlehem Iudaeae. Magimunera offerunt, et infantes interficiuntur. Regressio”, すなわち、「ユダヤの(町)ベツレヘムにおけるキリストの誕生。占星術の学者たちが贈り物を捧げた。また、子供たちを殺した。(エジプトからの) 帰国」<sup>14)</sup> と記される。

イエス・キリストの誕生の次第が叙述されるに当って、父ヨセフがダビデの子孫であり、その先祖の地「ユダヤの町ベツレヘム」が「キリストの誕生」の地であることがとくに強調される。マタイの福音書に引用された旧約聖書の言葉は、次のように述べられている。

『ユダの地、ベツレヘムよ、  
お前はユダの指導者たちの中で  
決していちばん小さいものではない。  
お前から指導者が現れ、  
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

『マタイによる福音書』2章6節

上記は旧約聖書の予言書『ミカ書』の5章1節と『サムエル記下』の5章2節から聖マタイが借りた言葉である。<sup>15)</sup> このように、「ユダヤ」の小さな町「ベツレヘム」からメシヤが到来するとの予言が成就する事実が告げられる。

『ケルズの書』の同じ頁による「占星術の学者たちが贈り物を捧げる」出来事は、輝く星を見た学者たちが東の方からやって来て、イエス・キリストをメシヤとして認めた箇所である。その時に、黄金、乳香、没薬などの「贈り物」が幼な子に捧げられる。<sup>16)</sup> この黄金の贈物によって、キリストが神の国の王であり、また、乳香によって、キリストが神性を備えた方であることが啓示される。また、没薬の贈物は、キリストが苦痛を経験する人であることをしめし、この世の痛みや苦しみを体験し、その人生の終わりには、十字架による死が控えていることを象徴的に語る。この時は、キリストがメシヤとして到来し、また、すべての人びとの救済をもたらす救い主であることが公に告げられた瞬間でもある。その後、主の天使が夢のなかでヨセフに現れ、次のように告げる。

「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしの告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている」



そのような知らせによって、ヨセフは幼な子と母マリアを連れてエジプトに避難し、ヘロデ王の残忍な策略より逃れるのである。

この同じ頁では、その終りの部分に、「子供たちを殺した」および「(エジプトからの) 帰国」という言葉が記される。ここには、マタイ福音書による詳しい叙述が多く省かれる。すなわち、ヘロデ王は星を求めて拌みに来た占星術の学者たちのことを知って、大きな不安に駆られて、心が動揺し、ついで、ヘロデ王は学者たちを呼んで、予言したメシヤである幼な子を見付けたなら、その居場所を教えるようにと命じているが、この写本からは、このような詳しい事情は省略されている。

マタイ福音書によると、学者たちはヘロデのところへ帰ってはいけないという天使による夢の告げを受けて、彼ら自身の国へと帰って行く。他方、ヘロデ王はその事実を知り、だまされたことを悟って、激しく憤る。そして、予言されたメシヤへの恐れのあまりに、ベトレヘム周辺にいた2才以下の男子を全員殺害するようにとの命令を下している。このような歴史的出来事は予言者エレミヤの言葉を通して、マタイ福音書には、告げられる。

「ラマで声が聞こえた。  
激しく嘆き悲しむ声だ。  
ラケルは子どものもことで泣き、  
慰めてもらおうともしない、  
子供たちがもういないから。」

『エレミア書』 31 章 15 節

『マタイ福音書による福音書』 2 章 18 節

この写本が語るように、このエレミヤによる予言が実現し、「子供たちが殺される」という悲惨な出来事が起っている。次いで、ヘロデが死んだ時に、主の天使はエジプトにいるヨセフの夢で現れて、イスラエルの地に戻るように語る。この写本の最後の部分には、マリアとヨゼフが幼な子イエスを伴って、「(エジプトから) 帰国する」ことが記される。

上記の同じ頁には、冒頭の文字“Natiuitas  $\chi\rho\iota$ ”の頭文字“N”が際立って美しく装飾されている。そのアイルランド風のイニシャル字体による独特のケルト芸術の絵画的な飾文字であり、それは大きな広がりを見せ、ダイナミックな印象を与える。このように、「キリストの誕生」を語るに当たり、この写本の筆者が大きな喜びに包まれていたことが、その伸び伸びとした大きな文字を通じて伝えられる。この字体の回りに

は、細長く複雑に絡み合った奇異な動物や蛇のような形像が描かれている。また、“N”字にある2本の縦線を結ぶ横の文字はS字形が反対になった形をして、美しい曲線が構成される。そこには、幾何学的なケルト模様が宝石のように美しく散りばめられている。

この頁では、前に述べたように、キリスト誕生の次第が手短に書かれる。“Natiuitas”で始まる初めの行は、“N”の字を除くと、紐線による花文字が描かれ、また、その間には、鳥や魚や蛇、および、鎖模様などが縦横無人に走っている様子が見られる。また、“*χρῖ* in Bethlehem”が書かれた2行目は、控え目な文字ではあるが、しかし、“*χρῖ*”の頭文字が綺麗に飾られ、明快な筆致が際立っている。

次いで、3行目の文字“*Iudeae Magi*”は、ふたたび大きな字体で表現され、その頁の中心部分を構成する。また、その冒頭には、“*Iudeae*”という字体が飾り文字によって記される。面白いことには、その“*Iudeae*”の文字は、前の行の終りと次の行の初めにわたって書かれている。“*Iu*”の文字について、“*deae*”という4文字が続くが、その前に、開かれた本を手にして座る人の姿がくっきりと描かれる。その人は、二本の裸足を大きく組むポーズで座り、読者の方を向いて、本を両手に持ち、指し示しているかのようなのである。そこには、神のことばが書かれていることが当然予測される。さらに、その人の顔の大きな眼差しは読者の方へと向けられる。これは、読者の注意を引く意図によってか、また、この写本を記した修道士が自らを自画像として描いたか、または、「ユダヤ」という言葉の間に挟まれている人なので、ユダヤ人を代表し、「ユダヤ」の一地方であるベトレヘムの町がとくに強調されている。

次の4行目には、“*munera offerunt, et*”，すなわち、「学者たちが贈り物を捧げた」との意の文字が再度小さい字体によって書かれる。また、5行目には、幼児を表わす言葉“*Infantes*”が大きな文字で書かれる、その語には“*Interficiuntur*”すなわち、「殺害した」という意の長い文字が途中で切れ、次の行にまたがっている。本来は、初めの“*Inter*”という文字の後に、ハイフン(連字符)を刻んで、次の行には、“*ficiuntur*”と書くべきである。しかし、この写本では、小さな人が石の上に座っている姿がハイフンに代って描かれる。この言葉、すなわち、「子供たちが殺された」という文字を書くに当たり、そのような悲惨な事実を述べるのに忍びない思いで、作者自身が即座に講じた策であったかも知れない。また、そこに座っている人間にはオレンジ色と緑色の菱形の模様の衣が着せられている。その人の手が殊更大きく描かれ、それは、あたかも祈るかのように高く掲げられる。最後の言葉“*ficiuntur Regressio*”が書かれている行には、はっきりとした字体が鮮明に記される。

このように、頁全体を埋め尽くす6行に亘るキリスト誕生の次第は、その行毎に、それぞれに異なったモチーフが描かれる。たとえば、1行目は判読しにくい組紐と縄目模様の曲線美が特徴であり、また、2行目はオレンジ色と緑色が主調となって、鎖目模様

が多く散在する。次いで、3行目は、作者の自画像とも思われる表象と共に、緑色とオレンジ色の絵模様の中に鮮やかな文字が描かれる。また、4行目の小さな文字は茶色と黒色を背景にして、はっきりと書かれる。5行目には、際立った緑色の模様が絵のように描かれ、大きな文字を美しく縁取る。最後の6行目には、小さい字体が美しい紺色を主調にして、くっきりと書かれている。また、その花のような飾り文字の間には、得体の知れない幾つもの動物や鳥などの生き物が描かれる。また、時には、動物たちが互いの尻尾を噛み合っている様子などが見られ、筆舌に尽きないほど神秘に包まれた雰囲気醸し出される。

鶴岡真弓によると、ケルト装飾美術の意義が次のように巧妙な表現によって解説される。

ケルト芸術の身上は、これらの文様を有機的に絡み合わせ、常に変転しつつ、自己増殖作用を遂げる装飾空間をつくりあげていくことにある。終りもなく、刻々と変貌する文様には、かつて輪廻転生や自然の神秘との交感を信じた異教ケルトの想念が記憶されているのではないだろうか。<sup>17)</sup>

このケルト的な組紐文様は、渦巻綾様や動物模様と共に、複雑な形態を創造し、そこから溢れてくる躍動感によって、神の生命力とかその永続性や無限性を表現するものである。このように、土着化した文化がキリスト教に深く根付いていることが明らかである。

この写本の前記の頁には大きな枠が四方に描かれて、美しいケルト装飾模様がふち飾りとなって付けられる。そして、よく近付いて観察するならば、上側の枠には、人間の顔が描かれている。その人の口からは組紐模様が吹き出ている。それは、あたかも水が溢れるかのように、神のことばが吹き出ているかの勢いである。さらに面白いことには、その人間の頭と左腕から延びた縁飾りがずっと延長線を記している。その線を辿って行くと、左下側の隅にある足の箇所までつながっている。また、この同じ人間の顔の斜め上には、大きな左の手が紺色と茶色の縞目模様の太い5本の指となって、右手らしき模様と共に鮮やかに描かれる。しかも、その5本の指を持つ手は、“N”の文字のすぐ真下に置かれ、あたかも、“N”という文字を掲げているかのようなようである。これは、救い主の降誕を歓迎する絵模様と呼べるのではないであろうか。とくに、聖マタイの福音には神のことばが書かれていて、しかも、それは人間の能力を遙かに越えた神の恵みによって導かれ、神の叡智である聖霊の賜物の働きを啓示するものである。

この頁は、全体的に、黄色とオレンジが主な色調となっているが、また同時に、散りばめられた緑色や紺色がよく解け合って、一種独特の優美な図案が生じる。また、ケルト芸術独特の複雑に交錯し合う組紐模様が、花と魚、鳥と蛇などのモチーフと一緒になっ

て豊かな調和を構成する。この頁全体には、アレクサンダーが言明するように、“like some conjuring trick”<sup>18)</sup> すなわち、「魔力を呼び起こすかのような魔術」がかけられたかのように感じられる。それは、一種の睡眠術が呼び起こす陶酔状態に似たものであり、また、怪しいほど美しい複雑な心像が描かれて、神秘的な色鮮やかな絵図を形成する。そこには、キリストの救いの業を通じて、不思議な魅力を持った一種独特の想像の世界が呼び起こされる。

#### (4)

この『ケルズの書』の一枚一枚が素晴らしい写本芸術であるが、そのなかでも、絵探的な興味をもっとも掻き立てるのは、34葉表にある装飾頁と言える。(p.64参照)これは“The Chi (X)-Rho (P) page”と通常呼ばれるカーペット頁を構成する。<sup>19)</sup> ラテン語の言葉が『マタイによる福音』1章18節の冒頭から引用される。“Christi autem generatio”すなわち、「キリストの誕生は次のようである」という文章がギリシャ語のキリスト名と混ぜて書かれる。

先ず、キリストの頭文字“Xρι”が大きく描かれ、美しい絵文字をなしている。これは、キリストの意であるギリシャ文字“Χριστοῦς”<sup>20)</sup>を表わす。ギリシャ文字“X”と“ρι”は、英語の“Ch”と“ri”にそれぞれ相当している。この“X”の文字には紫色が、また、“ρι”の文字にはオレンジ色がそれぞれに輪郭となり、キリストの名が自ずから浮き彫りになる。他方では、ラテン語“h generatio”の文字(“h”は“autem”，すなわち、「更に、しかして」の言葉の略)<sup>21)</sup>は黒いインキで小さく書かれる。以上のように、“Xρι”の3文字は組み合わせるモノグラム(図案文字)を形成して、キリストの救いが強調される。この3文字“Xρι”は他の部分とははっきりと区別され、とくに力強いタッチで描かれる。また、2つの人間の顔が模様となって描かれるが、1人は“X”の字の真上に、そして、もう一人は“ρ”の字の最後の部分と“ι”の文字に水平に跨っている。このような凝った模様には、救い主キリストの降誕を喜び祝う心が溢れ出る。とくに、美しい魅力的な渦巻の大小の群れは、巨大な頭文字に輪光のような輝きを与え、また、読む者の心を眩暈世界へと誘って来る。このように、神の業の素晴らしさとその神秘性を印象付けるのに非常に効果的な描き方を選んでいる。この美しい図案文字であるモノログ、“Xρι”は、キリストの名を強調し、同時に、ケルト芸術の特徴を総合的に表現するものである。

(It) contains examples of almost all the varieties of design to be found in Celtic art.<sup>22)</sup>

上記のように、ケルト文化による芸術的なデザインの粋と呼ばれるものがこの頁には思

う存分に表現される。たとえば、この“X”の頭文字の内側とか、その周りの空間には、複雑な渦巻だけでなく、また、さらに入り組んだ組紐模様が色彩豊かに描かれる。この頁全体は、鳥や動物などの文様によって埋め尽くされる。とくに、黄色とオレンジ色による絵巻き物のようなケルト的複雑怪奇な構図を成している。

この“The Chi (X)-Rho (p) page”は美しいモノグラム“Xρι”を中軸としている。また、その左横の縦線に添った箇所には、形は実際には小さいものであるが、読者の関心を引くほど魅力的な愛らしい絵が形成される。

Among its glories are two moths and three angels in the left-hand quadrant of the “X”, and rats eating the showbread, while being watched by two cats, which some have seen as an allusion to unworthy communicants<sup>23)</sup>

この“two moths”は「2匹の蛾」と呼ばれるように、美しく細かい図案のような絵で描かれる。その不可思議な蛾がある箇所の近くには、前述したように、あたかも、キリストの名を称えて賛美するかの様子をした3人の天使が大きな翼と一緒に描かれる。そのなかの1人の天使は他の天使たちとは少し離れた所に位し、シャムロック風の頭を抱く杖を2本両手に携える。他方、2人の天使は各々本を手にして、前方を真っ直ぐに見詰めながら、読者に向かって呼びかけている姿がみられる。

さらに、“X”のキリストを表す字に縦線を引くと、その下部には、丸いパンを中央にして、1匹ずつのねずみはそのパンをくわえている有様がみられる。(p. 64 参照) その近くには、同じく2匹の猫が両側からじっとその様子を伺っている。上記に引用した B. マックワース・ブラッドの意見によれば、この絵はキリスト教信者への教訓や戒めを意図して書かれたものと解釈される。また、ここに描かれるパンは“the showbread”，すなわち、昔ユダヤ人が安息日ごとにヤーヴェに供えた12個のパンの一つがその「供えのパン」(『出エジプト記』25：30 『レビ記』24：5-9)を示す。また、“rats eating”，すなわち、「パンを食べている2匹のねずみ」は「(ミサ<sup>セイサイ</sup>聖祭において) 聖体拝領をするのに相応しくない人々」を指すと説明される。このように、この場面の絵は“an allusion”，一種の「ほのめかし、当てつけ、風刺(間接的)」<sup>24)</sup>を目的にしたものと解釈されている。

しかし、この箇所をよく眺めると、2匹の猫の背中には、ねずみが1匹ずつ乗っているという至極平和な情景である。そこで、愚説と思われるが、この絵には、キリストの体を表象する聖体が中心とされていると判断できる。とくに、猫と鼠の共存という事実は珍しい現象であり、そこには、象徴的な意味が隠される。すなわち、ミサ聖祭において、祝福された聖体を礼拝することによって、違った人種や異なった国の人々が一体となって結ばれ、その結果、キリストの救いの業に深く参与することが可能となる。当時

ケルト文化と融合したキリスト教では、すでに、聖体礼拝の習慣が存在していたことが暗示される。ちなみに、清泉女子大学の創立母体である聖心侍女修道会では、その主な霊性として、ミサ聖祭と聖体礼拝が日々行われている。

さらに、小さな同じ絵の右側の箇所には“I”の字の下の部分がある。そこには、“the black animal, presumably, an otter”<sup>25)</sup> と説明されるように、「かわうそ」に似た動物がその口に1匹の魚をくわえている。初代のキリスト教徒が迫害された時代に、魚のイメージはキリスト教徒を意味する言葉として用いられていた。<sup>26)</sup> また、この動物の色が黒によって表わされるが、この“black”という単語には、「悪魔（または魔法）に関連する」ことが包含される。<sup>27)</sup> また、ギリシャ語辞典によると、魚は“ΙΧΘΥΣ”<sup>28)</sup> と書かれる。この語の最初のアルファベットの2文字に注目すると、その“ΙΧ”は“Ιησοῦς Χριστοῦς”<sup>29)</sup>、すなわち、「イエス・キリスト」を表す（『マタイによる福音書』1：1）。<sup>30)</sup> つぎのアルファベットの文字、“ΘΥ”に着目すると、それは“ὁ υἱὸς (του) Θεοῦ”すなわち、「神の子」を意味する（『マタイによる福音書』16：16）。また、最後の文字“Σ”は“σωτήρ”，すなわち、「救い主」を代表する（『ルカによる福音書』2：11）。<sup>31)</sup> 以上見たように、ギリシャ語の魚という単語には、奇しくも、「イエス・キリスト、神の子、救い主」という救い主キリストの神性と人性を表す特別な使命がそれぞれの頭文字に含まれている。そこで、この写本の絵模様には、かわうそという悪魔を代表する動物の口にくわえられた魚は、十字架上で犠牲とされたイエス・キリストを表象するとみなされる。しかも、キリストは悪魔と戦い、悪魔の勢力から私たちを救う方であることが明らかである。

このように、キリストの降誕の出来事を通じて、その十字架による救いの業にまで言及される。ここで見たように、この写本の各頁には、細かい点にまで、絵を描いた人々の信仰や当時の信心の業が表現されていることが明らかとなる。このように、この華麗な写本には非常に手の込んだ巧妙に隠された秘密の謎が数多く存在している。水之江有一が述べるように、この『ケルズの書』は、まさに、豪華本と呼ばれるのに相応しい写本である。

それは豪華という以外の表現のしようがないほどである。このように豪華な書物を造ることは、当時においては豪華な祭壇や祈りの場を造ることと同じであった。いづれも、神への感謝と証の気持がこめられていた。<sup>32)</sup>

司祭や修道士たちにとっては、聖書を筆写することは、神の言葉を知り、味わうことであり、また、その聖書の文字を通じて、神であるイエス・キリストとの交わりを深め、神への愛と感謝の証しすることでもあった。このように、キリストの良きメッセージを通

して、司祭や修道士たちの賛美の聲が朗々と響き渡り、彼らの祈りが美しい旋律のうちに奏でられるかのようなのである。

この『ケルズの書』は、キリスト教の神髄をケルト文化に深く融合させた傑作である。そこには、ケルト文化独特の優美な装飾文字、錯綜する渦巻と組紐の文様、象形文字にも似た鳥や花や動物の象徴的な図案などが、英知に溢れた神のことばと共に、色彩豊かに組み込まれる。そのまばゆいほど絢爛たる絵図には、複雑な渦巻や組紐による幾何学的図案のなかに、躍動する動物たちがみずみずしく描かれ、生命と豊穡の意義が脈々と伝えられる。とくに、非自然主義的美学を呈するケルト独特の異教文化のもとにあって、魚・鳥・孔雀・猫・鼠・蛇・竜などの姿は、ある時は過剰な緊張感を持って、また、他の時にはゆるやかな揺らぎを孕んだ雰囲気のもとに、美しく映し出され、その神秘性が一層高められる。そこには、聖と俗の二つの世界がよく調和されて、豊かな芸術性が高度の域に達している。

#### 注

- 1) Peter Brown: *The Book of Kells*, Thames and Hudson, 1980, p. 81.
- 2) Gearoid Mac Niocaill: "The Background to the Book of Kells" in *The Book of Kells MS 58 Trinity Cokkege Library Dublin*, Faksmile Verlag Vuzern, 1990, p.27. Columban & iona.
- 3) 鶴岡真弓: 『『ケルズの書』とケルト装飾美術』『學燭』Vol. 87 No. 3, 丸善, 1990, p. 35.
- 4) 水之江有一: 『アイルランド』, 研究社, 1996, p. 91.
- 5) Brown, 前掲書, p. 28, p. 81; Niocaill, 前掲書, p. 31.
- 6) 同上, p. 95.
- 7) 鶴岡真弓, 前掲書, p. 32.
- 8) Brown, 前掲書, p. 92.
- 9) Jonathan J. G. Alexander: "Descriptions of Illuminated Pages" in *The Book of Kells MS 58 Trinity Cokkege Library Dublin* Faksmile Verlag Vuzern, 1990, p. 307.
- 10) Alberto Michelini: *L' Anno Santo della Redenzione*, Edizioni Ares 1984, p. 16.  
Lord Longford: *Pope John Paul II*, George Rinbird, 1982, p. 28.
- 11) Alexander, 前掲書, p. 307.
- 12) Barbaro-del Col 訳注: 『新約聖書』, ドン・ボスコ社, 1976. p. 8.
- 13) Alexander, 前掲書, p. 307.
- 14) 同上.
- 15) フランシスコ会聖書研究所訳注: 『新約聖書』, 中央出版社, 1984, p. 9.
- 16) 同上.
- 17) 鶴岡真弓, 前掲書, p. 38.
- 18) Alexander, 前掲書, p. 310.
- 19) 『ケルズの書』: 丸善書店 (宣伝用パンフレット), 1989, p. 10.
- 20) Nestle-Aland: *Greek-English New Testament*, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1986, p. 2.
- 21) 田中秀央 (編): *Lexicon Latino-Japonicum*, 研究社, 1952, p. 50.
- 22) Ben Mackworth-Praed: *The Book of Kells*, Studio Editions, 1994, p. 28.

- 23) 同上.
- 24) 小稻義男他：『新英和大辞典』，研究社，1980, p. 1950.
- 25) Alexander, 前掲書, p. 310.
- 26) 荒井 献他：『聖書大辞典』，教文館, p. 157.
- 27) 小稻義男他, 前掲書, p. 219.
- 28) Lidell and Scoll: *Greek-English Lexicon*, The Clarendon Press, 1975, p. 386.
- 29) Nestle-Aland, 前掲書, p. 1, p. 409.
- 30) 同上, p. 45.
- 31) 同上, p. 156.
- 32) 水之江有一, 前掲書, p. 95.